

九月の終わり、三年B組の教室は少し蒸し暑く、放課後の空気が重く感じられた。窓から入る風が扇風機を回し、かすかな汗の匂いが漂っていた。文化祭の出し物を決める会議で、先生はすでに帰宅済み。残った生徒たちは、毎年恒例のイベントに期待を膨らませていた。

俺——山田拓也——は窓際の席でぼんやりと外を眺めながら、クラスメイトたちの話し声を聞いていた。毎年、文化祭の出し物は無難なものばかりだったけど、今年はなんだか雰囲気が違う。

佐藤健が教壇に立ち、軽く咳払いをして話し始めた。

「今年は特別なブースにしよう。『秘密の匂い体験ブース』——女子の体臭を嗅がせて、興奮した客がその場で自慰できるようにする。脇、頭皮、首筋、うなじ、ユニフォームの脇部分、マンコ、靴下.....全部オプションで。最終夜だけ飲尿サービスも特別に開放。部活ユニフォーム着用で、汗の染みた本物の匂いが魅力だ。料金は基本500円、フルコース3500円。ブース内で射精OK。」

教室が一瞬静まり返り、すぐにざわついた。男子たちは目を輝かせ、女子たちは顔を見合わせた。俺は思わず息を飲んだ。こんな大胆な提案、

冗談かと思ったけど、佐藤の目は本気だった。

橘みお——テニス部のエースで、ムチムチの巨乳と魅力的な曲線を持つ——が最初に手を挙げた。俺はいつもみおのことを遠くから見ていた。テニスコートで汗を流す姿、ユニフォームに張り付く体、時折風に乗ってくる匂い.....それだけで胸がざわついた。

「面白そう。私、テニスユニで参加するよ。汗かいてるし、匂いもそれなりにすると思うけど.....いいよね？」

みおは少し照れながらも、好奇心から賛成した。俺の方にちらりと視線を向けた気がして、心臓が跳ねた。

チア部の佐藤あかりが、小柄でムチムチの下半身を強調するように立ち上がったが、顔を赤らめていた。

「え、えっと.....私もチアユニでやるけど.....本当？ みんなに匂い嗅がれるなんて、めっちゃ恥ずかしいよ.....。でも、クラスみんなで決めるなら.....仕方ないかな。」

あかりはためらいながらも、クラスメイトの視線に押され、渋々同意した。

軽音部の藤原ゆづき――金髪ギャルで舌ピがキラリと光るムチムチのグラマラスボディ――が、ライブTシャツを想像させるように胸を張った。

「私、ライブ後のTシャツとミニスカ、黒タイツで出るわ。汗かいてるし、匂いもそれなりにあるだろうけど.....まあ、いいか。」

ゆづきはノリがいいが、周りの反応を見て少し不安げに笑った。

バレーボール部の伊藤あかり――ショートカットの活発なムチムチのアスリート体型――が立ち上がった。

「私、バレー部のユニフォームでやるよ。汗かいてるし、匂いも濃いと思う。」

陸上部の高橋れな――ポニーテールのスレンダーながらも引き締まったムチムチのボディライン――が少し離れて立ち、顔を赤らめた。

「え、待って.....みんなに嗅がれるの？ 恥ずかしいよ.....でも、クラスだし.....私も陸上部のユニフォームでやるかな。」

他の女子たちも「本当にやるの？」「恥ずかしいけど、面白そうかも.....」と半信半疑ながら、投票で多数決。俺も手を挙げた。結局、クラス

全員で決まった。教室に残ったのは、期待と少しの緊張、そして俺の胸に芽生えた熱い予感だった。